

2006・8・13

第3号



日本共産党
Japanese Communist Party
安藤たい作
ニュース

もう廃絶しかない！

広島・原水爆禁止世界大会に行ってきました

私安藤たい作は、8月の4～6日に広島で行われた原水爆禁止2006年世界大会に参加してきました。大会は1955年以来、曲折を経ながらも毎年開催。唯一の被爆国であり、被爆者が実際に住んでいる国・ここ日本で開催されてきた世界規模の大会です。

「まるで地獄」

大会二日目の分科会では被爆者訪問をし、3人の方にお話を聞きました。原爆が炸裂した直後は爆弾のあまりの威力に周りの酸素が燃焼し、息苦しかったこと。一週間近く川には死体が流れ続けていたこと。火傷した部分には昼頃から暑くなると蠅がつついてウジがわき、葉も足りず、てんぷら油を塗っていたこと。麻酔無しの外科手術による悲鳴がこだましていたこと。戦後も結婚できない等の差別を恐れ被爆をひた隠しにしてきたこと。具体的な証言の数々は「まるで地獄だった」との被爆者の方の言葉通り、原子爆弾の非人道性を肌で感じるものでした。

大会中に画期的判決

画期的だったのは大会期間中に原爆症認定訴訟の全面勝訴の判決が広島地裁で出たことです。原告の被爆者の方は十五回も万歳をしたそうです。開会式の最中に判決が報告されると、会場は総立ち、割れんばかりの拍手が巻き起こりました。この訴訟では、国のあま

りにも実態とかけ離れた原爆症認定制度の是非が争われていました。残留放射線の影響を無視し「科学的」とされる計算式を機械的に当てはめ、多くの被爆者の苦しみに対し「原爆のせいではない」と言い張る国の態度に明確に異議が突きつけられました。国は控訴せず、原爆被害の実相を認め被爆者の苦しみに誠実に寄り添うべきです。

と 実に 実 に

広島に行き、街を歩き、被爆者と接し話を聞き、平和記念資料館を見、黙祷を できました。直に言って広島で起きたことをまだまだ 分は分かっていなかったと わされました。「分かったつもり」になっていたのです。

に、誠実に 実と きう 力を ていくこと、これがいかに大 なことなのか。それを 感させられた でした。

安藤たい作は 実に にかい い、人 を に い のため 張りります

